

卑 弥 呼 の 血

東大寺
茂

石神古道（いしがみこどう）は奈良文化財研究所藤原宮跡資料室受付の女性が気軽に手書きしてくれた地図を片手に、研究所から少し離れた左の小道に入つていった。

小道の左手にはピンク色をした蓮の花の群生が、あるかなしかの真夏の風にほのかに揺らめき、左右には名も知らぬ、はかなげな薄紫の花をつけた球根畠が広がっている。

八月初旬の昼下がり。雲ひとつない青空から照りつける真夏の陽光は容赦なく全身にふりそそぎ、汗が噴き出してくる。

（この蓮の花は、先ほど藤原宮跡で見た古代蓮とは少し違うようだが……）

平城宮跡と違い、建物の礎石跡を示す朱色の柱状の杭が目に付くだけで、野草が生い茂つたままだ。だつ広い藤原宮跡の片隅に群生していた古代蓮を思い出しながら、石神は胸のうちに呟いた。そこを過ぎると、左手に天理教分教会が見えてきた。受付の女性の話だと、目的の香具山（かぐやま）登山口はその先すぐの三叉路からつながつていて、十分ほどで頂上にたどり着くという。

きつい坂道である。分教会から三叉路までわずか二、三分なのに、太り気味の六十五歳の石神にはこたえ、息切れがした。

三叉路には、石碑が立っていた。有名な、舒明（じよめい）天皇の国見の歌が刻まれている。

（大和には群山（むらやま）あれど　とりよろぶ天（あめ）の香具山　登り立ち国見をすれば　国

原（くにはら）は煙（けぶり）立ち立つ 海原（うなはら）は鷗（かまめ）立ち立つ うまし
国そあきづしま大和の国はく

舒明天皇は推古（すいご）天皇の後を継ぎ、六四五年の大化の改新前に亡くなっている。蘇我蝦夷（そがのえみし）が実権を握っていた時代である。その舒明天皇が香具山の頂上から国見をして詠んだ歌である。

国見というのは、その当時、高所から国の地勢や人民の生活を望見し、土地に祝福を与える儀礼として行われていたものである。歌の意は、「大和にはたくさんの山が寄り集まっているが、とりわけすぐれているのが天の香具山である。その頂上から国を見渡せば、平野には民のかまどの煙が立ちこめ、海原には鷗が飛び立っている。豊かなよい国だよ。大和の国は」——というものである。

石碑の前に立ちながら、石神は首をかしげた。わずか海拔一五二メートルに過ぎない香具山から海が見えるわけがなく、鷗が飛び交っているはずもないという長年の疑問に決着をつけるためにこの山にやつてきたのだが、現地に来てみると、香具山は山というよりなだらかな小高い丘で、教えてもらわないとその存在さえ分からぬくらいなのである。それなのに、何故このように歌ったのか？ 石神の疑問は益々深まるのである。

山頂への登山道は正面の山道に分け入っていくと標示されている。左に行けば「天香山（あまのかぐやま）神社」、右に行けば「天岩戸神社」である。

石神は山道に入つていった。やや急な細い山道には茶褐色の枯葉が一面に散らばっている。八月

の平日の昼下がりとあつてか、人つ子一人いない。静寂そのものである。周りを高木に囲まれた山道を登つていく石神の肩に、古代の靈魂が覆いかぶさつてくるような気さえしてくる。

五分ほどで頂上にたどり着いた。樹木が林立する頂上は想像以上に狭い。汗をぬぐう石神の目に、左手のベンチに腰掛けている女の姿が飛び込んできた。

そのベンチの周りだけが外に向かつて狭い空間が開け、そこから景観が望めるようになつていて。女は半ば朽ちかけたようなそのベンチから遠くの景色を眺めているのである。

長い髪を垂れ流し、白の長袖シャツに薄紫色のジーンズ姿の女は石神の存在に気づく風もなく、熱心に景色に見入つていて。石神は女の視線の先に目をやつた。わずかに開けた空間から、姿かたちが優美な小高い山とその手前に広がる町並みが遠望できた。

石神は女に近づいて声をかけた。

「こんなにちは」

驚いたように女が振り向いた。

その女の顔に、石神は思わず息を呑んだ。

旅情ミステリー作家の第一人者として数多くの女性に接する機会があつたが、このような顔の女性に会うのは初めてだった。

類なき美女である。目鼻立ち、口元それぞれが魅力的に整い、抜けるように色白の形のいい顔に見事におさまっている。とりわけ、透明度の高い、奥深い山中の湖のように澄んだ瞳は静謐（せいひつ）で、それに接するものの邪心を見透かすかのような輝きを放つていて。

その容姿に取憑（とりつ）かれたように見とれていた石神は、女が返した挨拶に気づかなかつたほどであつた。

「あの山はなんと言ふ山ですか？」

氣を取り直した石神は、遠くに見える優美な山を指差しながら女に問いかけた。

「あの山は、畝傍山（うねびやま）です」

その声も、天上でさえずる小鳥のように麗しい。

「そうですか、あれが畝傍山ですか——。私は香具山に登つたのは初めてですが、あまりに低いのに正直驚きました」

年の頃は自分よりはるか年下の三十前後にしか見えない女に、石神は無意識のうちに丁寧な言葉をつかつた。

「初めて登られた方は、どなたもそうおっしゃるようです」

「そうでしようね。私は東京からやつてきたんですが、舒明天皇の国見の歌が前々から気になつてしましてね。どうして、香具山から海と鷗が見えるのか、この目ではつきりさせたいと思いやつてきたんですよ。舒明天皇は一体、何を見てそう歌つたんでしょうかね」

「わたくしにもよく分かりませんが、周りにある池のことを歌つたとか、当時はこのあたり一帯は湿地帯だつたので、そのことを歌つたとかいう説があるようです」
「なるほど……とすると、鷗というのは、水鳥ということですか」
「そうなのではないでしようか」

女は、気品に満ちた表情に心持笑顔をにじませた。

その表情に、石神は心が騒いだ。

「あなたは奈良からこられたんですか」

石神は尋ねた。

「ええ、そうです」

「実は私は小説家の端くれでしてね。全国各地を回っては、その地の古い歴史や伝承を基にしたミステリーを書いています。次回策は、この奈良を予定していましてね。それで取材旅行にやつてきただですが、舒明天皇の歌が気になつていの一番にこの香具山にやつてきたというわけです」

石神は初対面の女に、いつになく饒舌（じょうぜつ）になつた。

「そうなのでですか。すばらしい生き方をされているのですね」

「生き方？なるほど——そう、生き方ですね」

このようないい方をされたことがない石神は、一瞬戸惑つたが、この女にふさわしい言い方だと納得したように相槌を打つた。

「香具山は高天原（たまがはら）へ通じる登り口といわれ、それで天の香具山と呼ばれてるようですが、今でも地元の人たちは香具山に対する信仰心は強いんですか？」

「どうでしようか？わたくしにはよく分かりません。ただ、香具山というのはもともと天上にある山の名前で、この香具山も日本書紀によれば、天照大神（あまでらすおおみかみ）が天（あま）の岩戸に隠れたとき、この山の真坂樹（まさかき）を掘り起こして、それに八坂瓊勾玉（やさかに

のまがたま)などの神宝を掛けで祈祷したとありますから、特別な山と考えられていたのではないでしようか」

「日本書紀にはそのように書いてますね」

「樹木は太陽のエネルギーと地からのエネルギーの両方を吸収します。樹木の多い香具山はそのため高天原への登り口になつていてるという方もおられるようです」

「なるほど——天上と地上を結ぶ通路だといわれている神木ですね。あちらの社（やしろ）が、天地開闢の際に最初に出現した神様といわれている国常立尊（くにとこたちのみこと）を祀った国常立（くにとこたち）神社ですか？」

「ええ、そうです」

ベンチから少し離れた奥に、小さな社がひつそりとたたずんでいる。

「申し訳ありませんが、わたくしはこれで……」

女は立ち上がりかけた。

「いやあーお引止めしたようで申し訳なかつたですね。それじゃ、私も一緒に下ります」

石神は、目の前に広がる畝傍山と小さな町並みに視線を投げかけ、ベンチから立ち上がつた女の後についた。スニーカーをはいた女は、身長百六十八センチの石神とほぼ同じ背丈である。ベンチの脇に置いてあつた、ベージュ色のレースのつば広帽子をかぶつた女は、「それではお先に失礼します」といつて山道を下り始めた。今まで気づかなかつた蚊が、汗がにじんだ石神の顔をめがけて襲い掛かってくる。石神はそれを片手で払いのけながら、女の後姿に目を注いだ。

やせてもいはず、太つてもいはず、ちようどいい肉付きの魅惑的な後姿である。石神は、ひよつとしてこの女は高天原から舞い降りてきた天女ではないかと思つた。

下りといふことであつて、三叉路にはあつという間にたどり着いた。

「この道の左右に天香山神社と天岩戸神社があります。是非見てお帰りになつたらいいと思います」

「そうですか——。あなたはどうされるのですか」

「わたくしは予定がありますので、ここで失礼させていただきます」

「ううん、それは残念ですね——。分かりました。折角ですから、私は見て帰ることにしましよう。私はここ数日、奈良に滞在します。よろしかつたら、ご都合のいい日にお会いできませんか?」

「ありがとうございます。でも、予定が立て込んでいますので失礼させていただきます」

「そうですか——。残念ですね。申し遅れましたが、私はこういうものです。これから先、お会いできるようなることがあります。あればいいんですがね」

石神は名残惜しげに名刺を差し出した。

天理教分教会への細い坂道を下りていく女の後姿を見送った石神は、その後二つの神社を見て回つた。しかし、女が去つた後の心はうつろで、気が乗らなかつた。

東京を出たのは昨日で、明日は現地の新聞社主催のシンポジウムに講師として参加し、その翌日は、三輪山山ろく周辺の古代伝承を題材にした次回小説のネタ取材のため付近一帯を回ることにし

て いる。しかし今 の 石神には、先ほど別れた女のほうがはるかに興味があつた。

2

香具山に登つた翌日、石神古道は地元新聞社が主催するシンポジウムに出席した。会場は奈良市 中心部にある「なら百年会館」で、テーマは歴史ファンならずとも多くの日本国民がきわめて関心 が高い「記紀と邪馬台国について」であつた。石神古道以外の講師は、東京からやってきたTK大 学文学部教授山村進（やまむらすすむ）、七十歳。地元奈良のT大学文学部教授海原陽一（かいは らよういち）、五十五歳の一人である。

午後一時の開会を待つ大ホール会場は歴史ファンで埋め尽くされ、熱気が充満していた。

定刻一時。本日の司会進行を担当する地元新聞編集長が壇上に並んで座つた三人の講師を紹介し、 口火を切つた。

「本日のテーマ、『記紀と邪馬台国について』の記紀は、いうまでもなく、古事記と日本書紀のことです。ご承知のように、古事記は七一二年、日本書紀は七二〇年に天武（てんむ）天皇の命により編纂されたわが国神代からの歴史を記した書で、編纂時期は奈良時代に当たります。一方、邪馬台国の記述が登場する中国三国時代の『魏志倭人伝』は、二八〇～二九〇年に書かれたもので、正史として位置づけられたものです。ところがどうしたことか、中国の正史に登場する邪馬台国、そして、その女王である卑弥呼に関する記述が記紀には登場してこないのです。わずかに、神功（じ

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。